

令和7年度 全国学力・学習状況調査結果の分析【第6学年】

(様式4)

北区立都の北学園

国語

結果の分析	授業改善の視点	具体的な授業改善案
学習指導要領の内容のほとんどの項目で、東京都、全国の平均正答率を上回っている。中でも「(3)我が国の言語文化に関する事項」は全国正答率より7.8ポイント上回っている。また、評価の観点別に見ると、「知識・技能」は全国正答率より4.6ポイント上回っており、問題形式を見ると「選択式」が全国正答率より5.5ポイント上回っている。しかし、学習指導要領の内容「C 読むこと」は東京都の平均正答率が61%で、本校は59.7%のため、少し下回っていることが分かる。	問題3三(1)の「目的に応じて、文章と図表などを結び付けるなどして必要な情報を見付けることができるかどうかをみる」問題の平均正答率が46.2%と一番低く、また無回答率も全国に比べ3.5ポイント高かった。図表やグラフなど資料をたくさん扱った説明文の読み取りや、新聞記事を使って必要な情報を見付ける学習を積み重ねていく。「目的や意図に応じて簡単に書いたり詳しく書いたりするなど、自分の考えが伝わるように書き表し方を工夫することができるかどうかをみる」問題が、全国平均正答率を6.1ポイント下回っている。まずは考えをもたせ、そしてそれが伝わるように書き表せるよう練習していく。	・図表やグラフなど資料をたくさん扱った説明文の読み取りや、新聞記事を使って必要な情報を見付ける学習を取り入れる。その際に考える時間を多くとり、自分で読み取ったことを書き表すことにも取り組ませる。 ・書くことに苦手意識をもつ児童が多いので、書く活動にたくさん取り組ませる。よく書けている文章を紹介することで、書けない児童が取り入れられるようにする。

算数

結果の分析	授業改善の視点	具体的な授業改善案
領域別、観点別に見ても、都の平均を上回るものだった。さらに領域別に見ると他の領域より、図形の単元がやや低い傾向にあるので、既習事項を確認したり復習したりすることを他の単元より、丁寧に指導していく。 また“正答数ごとの層分布”を見ていくと、11問以上正解した割合が57.5%ほどで、これは都の割合よりも多く習熟度別指導の成果と言える。しかし6問以下の割合は21.3%と都よりも多い結果となっているので、習熟度の個人差が顕著な傾向にあり、学力が二極化しているともいえる結果になった。	記述式で答える問題の無回答の割合が都の平均よりも高く、正答率も低い。問題文中の数値が何を表しているのかを考える機会を必ず作り、自分の考えを文章にする際、算数の言葉を使い説明できるようにすることで数学的思考力を高めていく。	・記述形式の問題は数値の意味を明確にし、授業で自分の考えを文章や図、表を使って書き表す時間を十分にとる。 ・既習事項の定着が不十分であることが結果の一因になっていると考えられるので、反復練習ができるドリルやワークシートを用意し取り組みせ、基礎基本の定着を図るようにする。 ・考え方の比較・検討する際の視点を示すようにし、どの解き方がよいのか話し合わせるようにする。

理科

結果の分析	授業改善の視点	具体的な授業改善案
全体の設問に対する平均正答率は、東京都平均を1.0ポイント下回っているが、全国平均と比べると1.9ポイント上回っている。領域別においては、「エネルギー」と[生命]領域において東京都・全国平均ともに2～4ポイント上回っている。観点別においては、知識・技能では1～3ポイント上回るが、思考・判断・表現では、全国平均をわずかに上回るが、東京都平均を2.4ポイント下回るという結果が出ている。しかし、今回の調査の分析で特筆すべきことは、無解答率がすべての設問(17個)において東京都だけでなく、全国平均をも上回っていることにある。さらに、2桁以上(10%以上)の無解答率は全17設問中の5設問に上る。これは、東京都の2設問(いずれも記述式問題)、全国の1設問(これも記述式問題)に比べるとかなり多いと言える。本校の場合、無解答の多くは思考・判断・表現の領域に当たる。また、最後の3設問では無解答率が8.2%で全国平均を6ポイント以上も上回っている。本校児童には、文章題や記述式設問において、解答を途中でやめてしまう児童が無視できない割合で在籍していると考えられる。それは、文章読解の能力や集中力の持続の問題であると考えられるが、習熟度や学力の二極化傾向へと発展する要因にもなり得ると考えられる。	解答率が特徴的に多い設問は2設問あり、17.8%と28.1%で、かなり高い数値であり、これは東京都平均を7.14ポイントも上回っている。これらはいずれも記述式問題であり、正答率も特徴的に低い結果が出ている。本校児童には記述式問題を不得意としている傾向がみられ、この対策は授業改善の目安になると考えられる。一方、無解答率が比較的に少ない設問での正答率が、本校児童の学習状況をほぼ正確に測れると判断できる。無解答率が少なく、そして正答率が東京都平均・全国平均を下回っている設問では、領域や観点に特異性がほぼ見られず、同じ領域や観点であっても正答率が高い設問と低い設問が見られる。これは、全国学力調査の設問には文章表現、イラストなどが教科書になく、初めて読んだり見たりする内容が多くあり、慣れていない状況で調査に臨んだ結果であると推測できる。そこで、授業改善の視点として考えられるのは、興味・関心の導入として実験・観察を有効に活用し、結果の考察で十分な時間をとって思考・判断の機会を増やすことにある。そして、問題演習の機会も増やし、様々な表現で展開される設問に対して、解決できる力を養成していくことも有効であると考えられる。	多くの児童が実験や観察に参加できる機会を増やし、授業中での発言やワークシートへの記入、ノートまとめなどを通して「思考・判断・表現」の能力を養う。問題演習の機会を増やす対策として、教科書の章末に展開する「たしかめよう」「考えよう」では、何を確かめ、何を考えるのかの確認を十分に行い、考えて判断して表現する習慣が身につくような授業展開をする。確認テストなどの問題演習では振り返りを十分に行うことで、問題を解答する適性の範囲を広げていく。 本校児童が不得意と思われる記述式問題への対策としては、まず、分かりやすい文章題と記述式問題を解くことから始め、演習時間とその振り返りの時間を確保する。また、分かりにくい文章題などで問題の意味が理解しにくい場合や、グラフやイラストの内容を理解する問題などでは、思考を途中でやめてしまわないように根気よく指導を行っていく。